

意識の死後存続を示唆する現象が教える世界観 ～ムーンショット目標との関連で～

The World View Suggested by Near-Death Experiences and Cases of the Reincarnation Type,
with Special Reference to a Research Goal of Japan's Moonshot Program

大門正幸

OHKADO Masayuki

Moonshot Research and Development Program, an ambitious new program started by the Japanese government, aims at solving issues facing future society. For this purpose, nine goals, called Moonshot goals, are set in the area of society, environment, and economics. This article focuses on the ninth goal of the Moonshot goals, “[r]ealization of a mentally healthy and dynamic society by increasing peace of mind and vitality by 2050,” and argues that Virtual Reality environments simulating (i) death as reported by near-death experiencers and those undergoing “death” in their past lives under a hypnotic regression therapy; (ii) life-between-life states as reported by children with memories of before conception; and (iii) past lives as reported by children with past-life memories will provide possible solutions.

Keywords : Moonshot Research and Development Program, Moonshot goal 9, near-death experience, life-between-life memory, past-life memory

1. はじめに

内閣府の主導で進められている大型科学技術プロジェクトであるムーンショット型研究開発制度では、我が国が抱える様々な困難な課題の解決を目指し人々の幸福に向けた、研究開発目標が設定されている。内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局の作成した「ムーンショット型研究開発制度の概要」（2021年9月）によれば、その概要は図1に示す通りである（内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局 未来革新研究推進担当, 2019）。

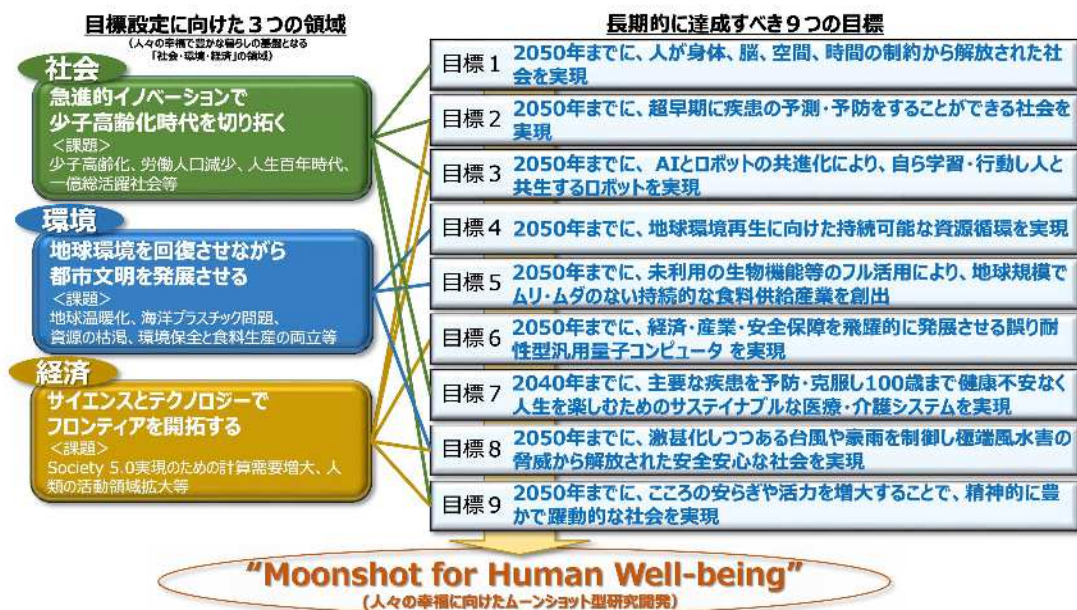


図1：ムーンショット型研究開発制度の目標

目標設定に向けて「社会」「環境」「経済」という三つの領域が取り上げられ、複数の領域に跨る形で、目標1から目標9まで、9つの目標が設定されている。

本稿で焦点を当てるのは、「2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」することを謳った目標9である。

目標9では、目指すべき未来像として「人々の対立や孤独、うつを低減し、こころの安らぎや活力を増大」させる「精神的に豊かで躍動的な世界」を目指すべき未来像として描き、具体的なターゲットとして、次の4つを設定している。

- ・2050年までに、こころの安らぎや活力を増大し、こころ豊かな状態を叶える技術を確認する。
- ・2030年までに、こころと深く結びつく要素（文化・伝統・芸術等を含む。）の抽出や測定、こころの変化の機序解明等を通して、こころの安らぎや活力を増大する要素技術を創出する。加えて、それらの技術の社会実装への問題点を幅広く検討し、社会に広く受容される解決策の方向性を明らかにする。
- ・2050年までに、多様性を重視しつつ、共感性・創造性を格段に高める技術を創出し、これに基づいたこころのサポートサービスを世界に広く普及させる。
- ・2030年までに、人文社会科学と技術の連携等により、コミュニケーションにおいて多様性の受容や感動・感情の共有を可能にする要素技術を社会との対話を行いながら創出する。

このようなターゲット実現に向けて、本稿では、以下の3点を示したい。

- (A) 機序の解明にはFrederick Myers (1843-1901) が提唱した意識モデルが有望である。
- (B) 安らぎや活力増大のための働きかけとして、臨死体験や胎内記憶現象に代表される、意識の死後存続を示唆する現象の研究によって得られる知見が重要な役割を果たす可能性が高い。
- (C) ターゲット実現に向けて実装可能な技術の一つとして、臨死体験や胎内記憶現象における体験を疑似的に経験できる仮想現実技術が有望である。

2. Frederick Myersの意識モデル

心霊現象研究協会 (Society for Psychical Research)の創設メンバーの一人で、「テレパシー (telepathy)」という語を造った人物でもあるMyersは、意識 (自己) を「普段意識できる部分」と「普段は意識されない部分」の二つに分け、前者を「閾値上自己 (Supraliminal Self)」、後者を「閾値下自己 (Subliminal Self)」と呼んだ (Myers, 1895; 1903)。「閾値上自己」は「顕在意識」と、「閾値下自己」は潜在意識と類似した概念であるが、Myersの想定する「閾値下自己」の射程は広く、図2に示すように、「死者の幻影 (死者との邂逅体験)」や「憑依体験」、「自動書紀」、「テレパシー」といった、いわゆる超常現象とかかわっており、また、世界に偏在する「世界霊 (World Soul)」とも繋がっている。

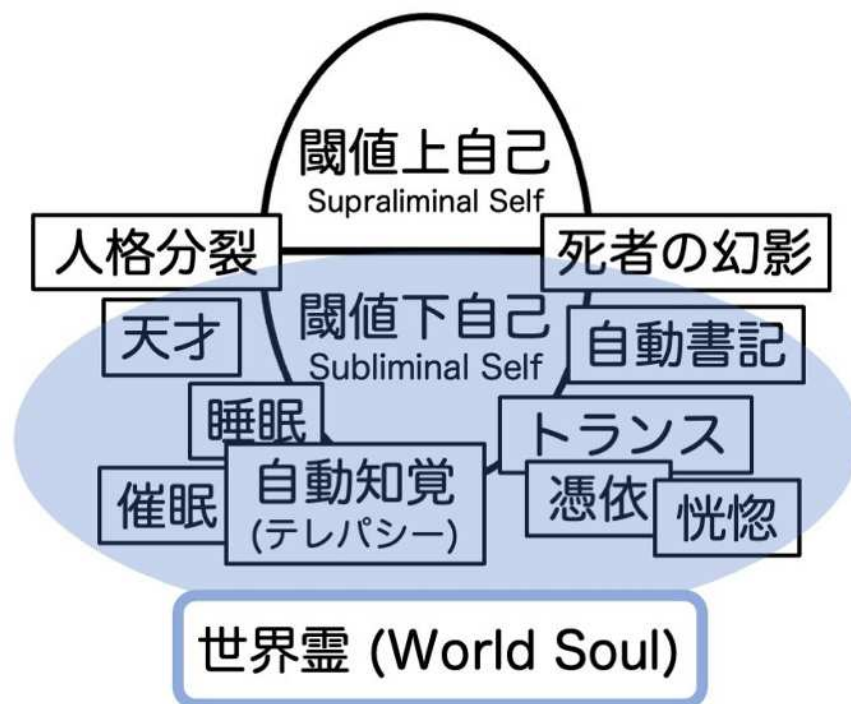


図2 Myersによる意識の構造モデル

このような広範な現象が人間の意識と関わることを示したMyersについて、アメリカ心理学の父と呼ばれるWilliam James (1842-1910)は、“[t]hrough him for the first time, psychologists are in possession of their full material, and mental phenomena are set down in an adequate inventory”と評している (James, 1901, p. 16)。また、西洋における無意識の「発見」の歴史について歴史的に検討したHenri F. Ellenbergerは、次のようにMyersを“one of the great systematizers of the notion of the unconscious mind”だと述べている。

... Myers believed that a thorough analysis had to be made of the problems of hypnosis and dual personality, as well as the current parapsychological phenomena, before the question of the communication with deceased spirits could be properly approached. He began a critical examination into the entire literature dealing with these topics. The results of this inquiry, in addition to the results of his own parapsychological research and that of his colleagues, were compiled in an encyclopedic work that was published posthumously in 1903. Myers was thus not only a parapsychologist, but also one of the great systematizers of the notion of the unconscious mind (Ellenberger, 1970, p. 314).

このような肯定的な評価にもかかわらず、Myersが列挙した「超常現象」は心理学の主流派によって取り上げられることはほとんどなく、Myersのモデルが焦点を当てられることも少なかった。しかし、経験科学の立場から人間の意識が肉体の死後も存続する可能性について探求を続けてきたバージニア大学知覚研究所のグループ¹⁾はMyersの研究およびMyersの意識モデルを高く評価しており、2007年に出版された大著、*Irreducible Mind: Toward a Psychology for The 21st Century*では、以下のように、Myersの提示したモデルに沿った心理学の再構築の必要性が謳われている。

Deeply admired by William James and other leading scholars of that period, this two-volume work [Myers, 1903] is unquestionably a great but neglected classic of our science. It advances an elaborate but empirically supported theory of the constitution and functioning of human beings, one that in many ways is sharply at odds with current mainstream thinking, but one that we believe penetrates far closer to the empirical truths of the matter. By framing the relevant issues in the context of Myers's work, we thought, we would be able to justify and to some extent foreshadow what we anticipate will become a major and vitally necessary reworking of central parts of scientific psychology (Kelly, 2007, p. xiii).

¹ 著者は、超常現象や人間の意識全般に関して造詣の深い Edward F. Kelly、臨死体験研究の第一人者である Bruce Greyson、霊媒現象を中心に研究を進めてきた Alan Gauld、主に催眠を対象に研究を行ってきた Adam Crabtree、哲学的なアプローチで超常現象を分析してきた Michael Grosso、生まれ変わり現象研究で名高い Ian Stevenson と共同で様々な現象を探求してきた Emily Williams Kelly の6名である。

このような性格を持つMyersのモデルにおける「閾値下の自己」は、肉体の死後も存続する部分、すなわち、人間の意識の根源的な部分である。もしこのモデルが正鵠を射ているとすれば、ムーンショット目標9が掲げる「こころの安らぎや活力を増大することによる、精神的に豊かで躍動的な社会」の実現には、この部分に関する理解と働きかけが決定的に重要となるであろう。

3. 現代社会が抱える諸問題と意識の死後存続を示唆する現象

Myersのモデルにおける閾値下自己に関わる現象、すなわち、意識の死後存続に関わる現象の研究から得られる知見が、ムーンショット目標9がターゲットとする具体的な問題とどのように関わるのかについて、考えておこう。

ムーンショット目標9のプロジェクトマネージャー公募情報が公開されているページでは、プログラムディレクター(PD)による補足文書において、以下が対応すべき諸問題としてあげられている(熊谷、n.d.)。

- (1) 個人におけるうつ・ストレス・不安・孤独・自殺等
- (2) 個人間・集団における虐待・DV・いじめ・軋轢・紛争・多様性への不寛容等

これらの諸問題への対処の手がかりの一つとして、人生観の変化を引き起こす諸現象の存在を挙げることができる。以下ではその代表として、臨死体験と広義の胎内記憶について考察する。

なお、これらの現象が(どこまで)現実世界を反映したものなのか、また現実世界を反映したものだとしてもどのような現実世界を反映したものなのかという点については議論の別れるところであるが(Sudduth, 2016)、ここではこれらの現象の真実性について論じることは避け、それらに関する知見がどのように応用可能かという点に焦点を絞って考察を進める。

3.1 臨死体験

臨死体験が、特に欧米で、本格的な研究対象となったきっかけは、1975年のRaymond Moodyによる*Life After Life* (Moody, 1975) の出版であった。150人もの体験をまとめたこの本は超ベストセラーとなり、死に瀕した多くの人々が共通の体験をしていること、しかもその体験が単なる夢とは片付けられないような現実性を持つ重要な体験だということが公になった。「死にかけて頭がおかしくなった」、そう思われることが怖くて体験を自分の胸にしまい込んでいた多くの人たちは、自分の体験が単なる夢や幻覚ではなく、また異常なことでもないことを知って、体験を語り始めるようになった。

臨死体験に関する研究が盛んになり、1981年には臨死体験研究を対象とした組織

International Association for Near-Death Studies (IANDS)が創設された。2009年には30年におよぶ臨死体験研究を総括するハンドブックが (Holden, et al., 2009)、2018年にはIANDSの機関誌に掲載された、臨死体験研究の基礎となった主要論文を集めた書籍が刊行された (Batthyány, ed., 2018)。

臨死体験研究によって明らかになった、臨死体験者が経験する一般的な内容は次の通りである。

- ・体外離脱：意識が体から分離する（自分の体を上の方から見る、など）
- ・トンネル体験：暗いところに行く
- ・光体験：まばゆい光に包まれる（大変な心地よさ、愛のエネルギーを感じる）
- ・霊的存在との邂逅：故人や神様のような存在と出会う
- ・人生回顧：自分の人生を回顧する
- ・境界体験：生と死の境界のような場所にくる

このような特徴を持つ臨死体験であるが、中でも「光体験」によって感じた至福の境地、霊的存在との邂逅によって、人生における愛の重要性について学んだと語る体験者は多い。

3.1.1 鈴木秀子氏の臨死体験と愛の重要性

たとえば、不慮の事故で臨死体験をした鈴木秀子氏は、自身の光体験を次のように記している。

・・・私は一瞬のうちに高さの極みに飛翔し、それまでに見たことがないような美しい光に包み込まれました。そこは、白っぽい金色の輝きに満ちた、一面の光の世界でした。まばゆい輝きでしたが、まぶしすぎるとは感じませんでした。

それは生命の深い部分で自分とつながり、交流している、生きた光だと感じていました。

これこそ至福の境地なのだ。完全な自由なのだ――。そう感じつつ、不思議なくらい、五感も思考もすべてがいきいきと冴えわたっていました。きっとオリンピック選手がベストコンディションで世界新記録を樹立する瞬間とは、こんな状態のときなのでしょう。からだの全機能が最高の状態に保たれ、調和し、まさにとぎすまされているのです。

その冴えわたった意識の中で、私ははっきりと理解したのでした。

「この生命そのものの光の主に、私はすべてを知りつくされ、理解され、受け容れられ、許され、完全に愛されている。これこそ、愛の極地なのだ」と。

愛に究極というものがあるとするなら、こういう感覚につらぬかれた状態のことではないだろうか。あるいは、真に満たされた状態とは、こういうことをいうのではないだろうか。

しかも、その満たされた光の世界には、時という観念が存在しません。これこそが永遠なのだと私は直感していました。

心は愛に満たされ、知性は冴え、能力のすべてが最高の状態で調和しています。

(中略)

・・・光であり、生命そのものの主が私に、「現世に帰りなさい」と言いました。それは、音声による言葉ではありませんでしたが、そう伝えられたことが私にははっきりと認識できました。

そして、さらに続けて、次のメッセージを受け取りました。

「現世に戻ったとき、いちばん大切なのは、知ることと愛すること。その二つだけが大切なのだ」

その瞬間、一時的に意識が戻ったのです（鈴木, 2005, pp. 15-17）。

この鈴木秀子氏のように、人生における愛の重要性を学んだと語る臨死体験者は多く、Ellis (2012)は100を超える、類似の事例を収集、分析し、臨死体験を通して体験者が得た学びの本質部分は次の通りだと述べている。

- ・我々は死なない。
- ・愛の本質は我々が想像してきたよりも遥かに深い。
- ・愛は高次の性質を持つ。
- ・愛を放出する源は多岐にわたる。
- ・我々は一つであり、その本質は愛である。
- ・全てのことには理由と目的がある。
- ・人生において最も重要なのは愛である。

3. 1. 2 人生回顧とDannion Brinkley氏・巽氏の臨死体験

また、臨死体験中の人生回顧によって、体験前の自身の行いを振り返り、生還後に生活を一変させた事例も多い。中でも劇的なのは、非行に明け暮れる少年時代を過ごし、ベトナム戦争に従軍、その後に軍関係の仕事に携わったDannion Brinkley氏の体験である（Brinkley, 1994）。

1975年、落雷によるショックで死亡が確認されたBrinkley氏（の意識）は典型的な臨死体験をした。体外離脱後に、倒れている自分の肉体、心配蘇生法を行う妻、友人、自分の死亡を告げる到着した救急隊員など自分を取り巻く状況を見た。やがてトンネルに包まれ、暗闇を抜けると、深い愛に溢れる光に包まれた。その場にいた光の存在の一人に包み込まれ、自分の人生の回顧が始まった。

まず、喧嘩に明け暮れた荒れた少年時代を回想した。数多くの殴り合いの喧嘩、窃盗、いじめの一つ一つを鮮明に思い出したが、通常の回想とは違って、氏の言動によって傷つけられた者の苦悩・屈辱を自分の感覚として感じ取った。自分の行いによって苦しむ両親

の気持ちも感じた。

ベトナム戦争に従軍していた時の回想では、自分が狙撃した北ベトナム軍大佐の視点から、頭を吹き飛ばされた時の混乱、死を自覚した時の悲しみ、一家の大黒柱を失った時の家族の悲しみさえを感じた。敵方の政府役人を暗殺するために滞在先のホテルを爆破した場面の回想では、命を失った人たちが自分の人生が突然断ち切られたことを知った時の恐怖心やその人たちの家族の苦しみ、その死によって未来の世代がこうむった損失さえも感じた。

軍の任務を終えた後に携わった武器輸送の仕事に関する回想では、自分が運んだ武器による犠牲者や犠牲者の家族の悲痛を感じた。

人生回顧が終了し、自分の行状にすっかり恥いていたBrinkley氏に対して、光の存在は、人生の終わりに得る愛・思いやりは、自分が人生の中で他人に与えてきた愛・思いやりに一致すること、したがって、愛こそが重要であることを伝えた。

その後、奇跡的に生還・回復を果たしたBrinkley氏は大きく生き方を変え、新しい仕事に加えて、週に二十時間ほど、ホスピスや老人ホームでボランティアを行うようになった。ここでは割愛するが、Brinkley氏はその後、さらに二回の臨死体験を経験し、さらに学びを深めている (Brinkley, 1995; 2008)。

臨死体験中の人生回顧で、自分が関わった人物の気持ちを実感した別の事例として、巽一郎氏の体験がある。25歳の時にバイクの事故で死にかけ、臨死体験をした巽一郎氏は、次のように語っている (秋山他, 2019, pp. 79-80)。

それで、よく死にかけた人たちが自分の人生がパラパラ漫画のように見えるっていうでしょ？ そのとおりなんです。日常のささいな出来事などの膨大な情報が一気に思い出されてくる。たとえば、4歳の時に隣のター坊を殴ってしまったことなど。それが25歳の頭で再生されるんです。それも、相手の気持ちの側から思い出すんですよ。ター坊の立場からすると、「なんで、こいつにこんなことをされなあかんのや！」みたいな気持ちですね。そして、25歳になった僕が「ああ、悪かったな」と反省をしながら、そのことを振り返るような感じ。

このように人生回顧の際に自分が関わった人物の側からその人物の気持ちを感じるようになる (可能性がある) という知識は、他者を傷つけるような言動を抑制する方向に働くであろう。

3.1.3 臨死体験による人生観の変化

臨死体験研究においては、このような体験が現実の体験なのか、脳が作り出した幻想にすぎないのか、ということが問われ続けてきたが、同時に臨死体験が人生観や生き方に与える影響に焦点を当てる研究もなされてきた (Bauer, 1985; Flynn, 1986; Grey, Noyes, 1980; Ring,

1980, 1984; Sabom, 1982;)。ここでは具体例として、最も体系的に調査された臨死体験研究で、権威ある医学誌として名高い *The Lancet* 誌に掲載された Lommel et al. (2001, p. 2042) のデータと、それをより分かりやすく書き換えた Lommel (2010, p. 68) のデータを挙げておこう。

表1 患者個人の2年後と8年後の人生変化目録の数値 (Lommel et al., 2001)

Life-change inventory questionnaire	2-year follow-up		8-year follow-up	
	NDE (n=23)	no NDE (n=15)	NDE (n=23)	no NDE (n=15)
Social attitude				
Showing own feelings	42	16	78	58
Acceptance of others	42	16	78	41
More loving, empathetic	52	25	68	50
Understanding others	36	8	73	75
Involvement in family	47	33	78	58
Religious attitude				
Understand purpose of life	52	33	57	66
Sense inner meaning of life	52	25	57	25
Interest in spirituality	15	-8	42	-41
Attitude to death				
Fear of death	-47	-16	-63	-41
Belief in life after death	36	16	42	16
Others				
Interest in meaning of life	52	33	89	66
Understanding oneself	58	8	63	58
Appreciation of ordinary things	78	41	84	50

※人生変化目録 (Ring, 1984) の数字の総合点を示したもの。人生変化目録の各項目は「大きく増加 (+2)」、「幾分増加 (+1)」、「変化なし (0)」、「幾分減少 (-1)」、「大きく減少 (-2)」の5段階で回答したもの。

表2 患者個人の2年後と8年後の人生変化目録の数値 (Lommel, 2010)

	Increase (percent) with NDE		Increase (percent) without NDE	
	At 2 years	At 8 years	At 2 years	At 8 years
Understanding oneself	58	63	8	58
Positive outlook on future	26	57	58	50
Understand purpose of life	52	63	25	50
Showing emotions	42	78	16	58
Wanting to help others	26	73	8	58
Opinion of others	-31	-21	8	41
Listening to others	47	52	8	75
Accepting others	42	78	16	41
Showing love	52	68	25	50
Compassion for others	47	73	41	50
Empathy with others	36	73	8	75
Involvement in family	47	78	33	58
Interest in meaning of life	52	89	33	66

Appreciation of money and possessions	-47	-42	-25	-25
Importance of nature and environment	47	84	33	58
Importance of higher standard of living	-25	-50	0	33
Appreciation of ordinary things	78	84	41	50
Sense of social justice	75	68	16	33
What matters in life	42	57	33	66
Meaning of faith	52	57	33	66
Sense inner meaning of life	52	57	25	25
Religious beliefs	36	47	16	25
Church attendance	-15	-42	8	25
Interest in spirituality	15	42	-8	-41
Interest in death	21	47	8	8
Fear of death	-47	-63	-16	-41
Fear of dying	-26	-47	-16	-25
Belief in life after death	36	42	16	16

※表の数字は臨死体験後に「大きく増加」あるいは「幾分増加」と回答した人の割合、マイナスは「幾分減少」あるいは「大きく減少」と回答した人の割合。

これらの表は、心臓発作により死に瀕した人で臨死体験した者（NDE/with NDE）としなかった者（no NDE / without NDE）の体験から2年後および8年後の人生変化目録の数値を比較したものである。表1では人生変化目録の数値を合計した数値が挙げられているが、表2では数値の変化の割合が挙げられている。いずれの表においても、臨死体験者の方が非臨死体験者よりも大きな変化を感じている傾向にあり、また、臨死体験者・非臨死体験者のいずれも、2年後よりも8年後の方が変化の度合いが大きいことが見て取れる。

これらの表の各項目に目を向けると、特に臨死体験者は、感情を表す、他人を受け入れる、他者への共感の気持ち、家族に関わる、自然や環境への配慮、日常的な物事への感謝、社会的正義、人生の内的意味の希求、霊性への興味、死後世界が存在するという信念といった項目で数値の上昇が見られる。一方で、他人の意見を気にする、金銭や物の所有欲、教会に通う頻度、死への恐れ、死ぬことへの恐れ、といった項目で数値の減少が見られる。

このような性質を持つことから、もし安全な状況下で臨死体験と同様の体験をすることが可能であれば、それが、うつ・ストレス・不安・孤独・自殺等の個人的問題や虐待・DV・いじめ・軋轢・紛争・多様性への不寛容といった個人間・集団に抱える諸問題への解決策の一つとなるであろう。

3.2 退行催眠時の「死」の体験

臨死体験のように生命を危機にさらすことなく、擬似的な「死」の体験を可能にする技法の一つとして、過去生退行催眠（いわゆる「前世療法」）を挙げることができる。過去生退行催眠による「死」の体験の具体例として、奥山医師が著書で紹介している、60代男性（大学教授）の例を挙げておこう。以下はこの男性が過去生での死を迎えた後、光と出会う場面である（奥山,2005,pp.39-40）。以下、「C」は「クライアント」である男性、「D」は奥山医師（ドクター）である。奥山医師の問いかけに対して、クライアントが返答する形

でセッションは進んでいる。

- C ……光が見えます。
- D その中に吸い込まれます。中はどんな感じですか？
- C 癒されています。(泣く)
- D その中心に、誰かいますか？
- C ご先祖様がいます……あったかい。
- D ご先祖様に聞いてください。今回の人生の私の使命は何ですか？
- C 家族で仲良く、楽しく暮らすことだ。
- D どうしたらできますか？
- C 今のままでいい。
- D 今回の人生の目的は何ですか？
- C 今のままで、たくさんの人に優しくしなさい。

この後、クライアントの男性が光の存在から生き方に関する様々な助言を受ける場面が続く。

この男性は、退行催眠を受けた後、人生観に関して大きく5つの変化があった、と述べている。(奥山, 2005, pp. 50-53)。

1. 人は死後も意識体として存在するという確信

それ以前も、人間は死後も意識体として存在し続けるという仮説や、生まれ変わりが存在するという仮説を疑ったことはありませんでした。

しかし、実際に奥山先生の下で退行催眠を受けてからは、信じるという行為が確信に変わりました。何しろ、自分の死の場面を思い出した際に、意識体が自分の身体から離れていくのを追体験してしまったのですから。「死とは、肉体を脱いで生きること」という言葉がありますが、これを実感しました。

とくにそれまでも死に対する恐怖心はあまりありませんでしたが、この体験以降はその感じが強くなりました。

2. いつも見守られているという確信

不思議な体験ですが、大阪へ向かう新幹線の中で、そばにいる複数の意識体の存在を感じていました。

実際に催眠を受けてみるとそれらの存在をよく認識することができ、いつも私を見守ってくれている意識体であると理解できました。また、催眠中に愛の集合体ともいふべき大きな光の存在を知ったときには、ありがたさで涙が止まりませんでした。

私たちは自分ひとりで生きてきたような気がしていますが、実際にはこのような意識体の存在、それに大きな光の存在が四六時中私たちを守り導いてくれているのです。

ね。このこともまた、単なる頭の中の知識としてだけではなく、実感できたことに喜びを感じます。

3. 人間はトランスパーソナルな存在であるという確信

中間生（肉体を離れた個々の魂が集うレベル：著者注）では、他の意識体とのつながりを強く感じました。みんな心で会話し、すべてが仲間であるということが、単純な事実として理解できました。

この世は修行の場ですから、いろいろな問題や壁にぶち当たることもあります、それを克服しようとする過程は人間が成長するのを助けてくれると思います。

その問題や壁となるもののなかでも、人間関係は大きな位置を占めているのではないのでしょうか。この世ではさまざまな人間関係に苦しむことも多いのですが、今回、退行催眠中に他の意識体と交流してみて、それらの人間関係は単に演じられているものにすぎず、本質ではないということがよくわかりました。

4. 人は愛にあふれ、とても楽しい存在であるという確信

他の意識体との交流や光との対話によって、悪い人間は本質的には存在せず、人は誰でも愛にあふれているということがよくわかりました。すべて愛を基本にして、お互いにいろいろな役を演じているのですね。

退行催眠を受けた後は、とくに、家族に対する感謝の心と愛情が、より深まったと思います。彼らは何しろ、過去生で私が犯した罪を快く赦し、また今回の生でも一緒になって尽くしてくれているのですから。

光と対話している間、私はあふれんばかりの愛を全身で感じていました。大きくて温かくて、すべてを抱擁してくれる光の存在と一体になったときの至福感は、今でも忘れることができません。ただただありがたくて、泣けて泣けてしかたがありませんでした。本来、私たちは愛にあふれ、とても楽しい存在だったのですね。

5. 使命、生きる意味の確認

退行催眠を終えてから、「なぜ私が存在しているのか、何をなすべきなのか」ということを再認識することになりました。地位や名誉、財産などを追い求めていた過去生での私の姿は、今生でのかつての私と重なって見えます。

本当に大切なものは何なのか、それに気づき始めてから数年しかたっていない時期に今回の経験ができたことは、私の気づきをより推し進めてくれるものとなりました。とくに、光との対話の中で私の今生の使命を確認できたことは、今後の人生を送る指針ともなるべきものです。

これらの変化は、臨死体験者の多くが感じた変化と類似しているようである。実際、臨死体験研究で標準的に用いられる尺度を使って、その点を確認した研究も存在する。

Ohkado and Greyson (2018)は、前述のRing (1984)による人生変化目録を改訂した、改訂版人生変化目録 (The Life Changes Inventory-Revised, Greyson and Ring, 2004) を用い、退行催眠における擬似的な「死」の体験が与える人生観の変化も臨死体験と類似していることを示している。なお、Ohkado and Greyson (2018)は臨死体験尺度 (The Near-Death Experience Scale, Greyson, 1983) を用いて、退行催眠時の死の体験をした被験者を分析し、その体験が臨死体験と極めて類似している点についても確認している²。

退行催眠における人生観の変化が臨死体験同様、長期的に持続するのか、など、今後解明されるべき課題は多いが、退行催眠が前述の問題に対する有望な対処法の一つであると言うことは可能であろう³。

3.3 胎内記憶

「胎内記憶」という表現は、産科医の池川明氏の活動によって女性を中心にすっかり定着した感があるが、文字通り「母親の胎内にいた時の記憶」を表すだけでなく「出産時記憶」や「過去生記憶」、過去生での死後、受胎するまでの「中間生記憶」を含む大変広い概念として用いられている⁴。本稿の目的という観点から言えば、重要なのは「中間生記憶」と「過去生記憶」である。また、中間生記憶は大きく(i)「自分の遺体を見る、地上の様子を見る」(ただし「過去生記憶」を持つ場合)、(ii)「この世とは違う場所にいる」、(iii)「親を選ぶなど誕生への準備をする」という三つの段階に分けられるが (Sharma and Tucker, 2004)⁵、特に重要なのは三つ目の段階である⁶。

3.3.1 「中間生記憶」

「中間生記憶」を語る子どもの多くは「親を選んだ」と語るが、中には人生の使命を選んで生まれてきた、と語るこどももいる⁷。たとえば、筆者がインタビューした一人であるナツキちゃんは、生まれる前にいる世界には「かみさまと約束する場所」があり、そこに(上の階層から)階段を降りてやってきて、約束できた人、すなわち、かみさまと相談し

² 体験自体の類似性については、Pederzoli et al. (2021) も臨死体験尺度を用いて確認している。

³ この他、モンロー研究所 (The Monroe Institute) のヘミシンクという音響技術や、劇的な臨死体験をした脳神経外科医として著名な Aben Alexander 氏が自分の臨死体験の再現を目指して制作した *Seeking Heaven* のような音響技術があるが (Alexander, 2013)、筆者の知る限りでは、それらを用いた体験に関する十分な報告がないためここでは割愛する。

⁴ 池川明氏は、「精子記憶」、「卵子記憶」、「着床記憶」なども胎内記憶の一つとして含めている (池川, 2000, pp. 27-28)。

⁵ Jim Tucker 氏や James Matlock 氏、Erlendur Harraaldsson 氏など、「生まれ変わり現象」の研究者の多くは日本語の「中間生記憶」に相当する “intermission memory” という語を「過去生での死から現在生での誕生までの記憶」という意味で用いている。にもかかわらず、Sharma and Tucker (2004) では同じ語を「過去生での死から受胎までの記憶」の意味で用いており、混乱が見られるようである。

⁶ 過去生記憶を持たない場合、関係するのは2番目と3番目の段階のみである。

⁷ 映画『かみさまとのやくそく〜あなたは親を選んで生まれてきた〜』(荻久保, 2016) にはそのように語る子どもが複数登場する。

て人生の使命を決めることができた人だけが、ジャンプしてママのおなかに入ることができる、と語っている。図3はナツキちゃんが3才6ヶ月の頃に描いた生まれる前の世界の図で、左の方に「階段」、「かみさまと約束する場所」が見える。

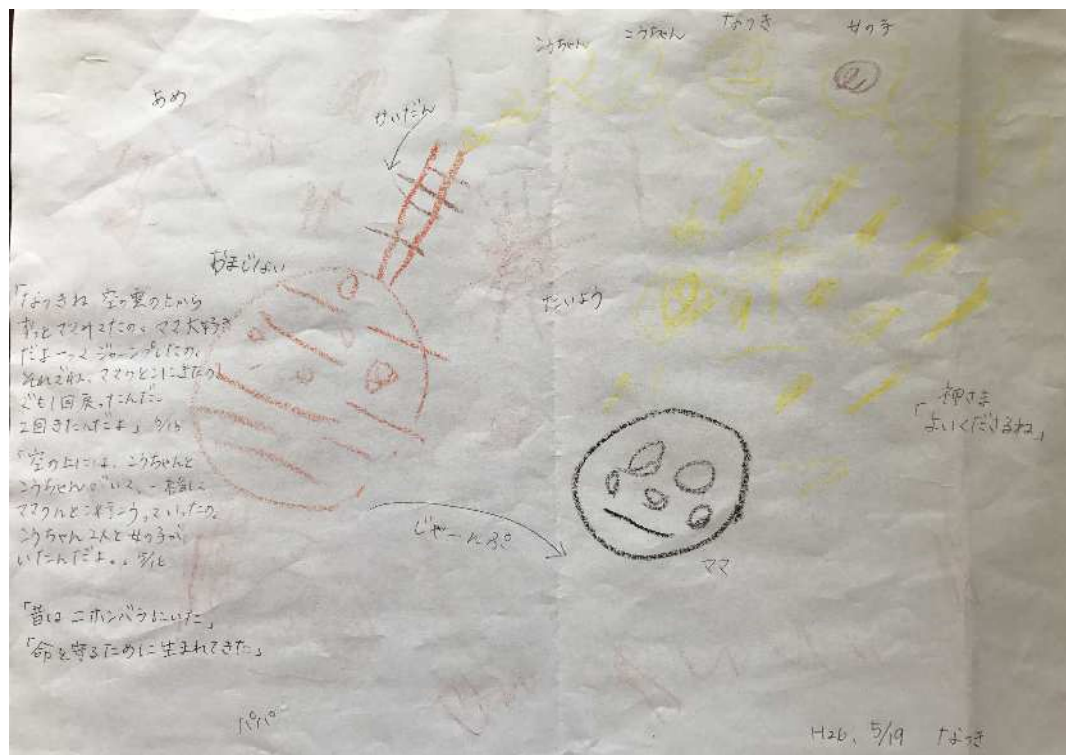


図3 ナツキちゃん（3才6ヶ月の頃）が描いた生まれる前の世界（文字は母親が記入）

この絵を描いた頃のナツキちゃんが語った、生まれてきた理由は「前世では病院で命を助けていた。人を助けるために生まれてきた」、「前世ではママのおかあさんだった。自分の子ども（今のママ）が心配で心配で来た」とのことである（大門,2018,p.16）。

ナツキちゃんの事例で興味深いのは、ナツキちゃんが胎内記憶を語ったことによって、母親が大きな人生観の変容を体験したことである。ナツキちゃんが胎内記憶を語り始めるまでは、未熟な子どもを教え導くのが親の役割だと思っていた母親だったが、ナツキちゃんの語る胎内記憶に接してからは、肉体を超えた世界があり、子どもはその世界から目的を持って親の元にやってくる独立した魂であり、親が何か教え込む必要はなく、むしろ子どもの方が親に何かを教えようとしている、と考えるようになった。ナツキちゃんの発言がきっかけとなって生じた、母親の人生観の変化を、改訂版人生変化目録で測定したところ、臨死体験の場合と同様の変化が見られ（大門,2018）、子どもが胎内記憶について語ることが、霊的変容をもたらす可能性が示唆された。

インターネット調査会社を利用して胎内記憶に関する大規模なアンケートを行った Ohkado (2005)においても、我が子が胎内記憶（「過去生記憶」、「中間生記憶」、「狭義の胎内記憶」、「誕生時記憶」）を語ったことが親子関係にいい影響を与えた、と答えた母親が7割

ほどを占めたが、これも人生観の変化を反映したものであろう。

さらに興味深いのは、Ohkado (2005) において、自分の子どもは胎内記憶を語っていないと答えた回答者の6割ほどが、「自分の子どもは胎内記憶を語ってはいないが、そのような記憶を語る子どもが存在するという事実を知るだけでも親子関係に良い影響があった」と答えている事実である。

以上のことから、胎内記憶、特に「中間生記憶」について知ることが、人生に対してより肯定的な態度を取ることにつながる可能性が示唆される。

3.3.2 「過去生記憶」

「過去生記憶」を持つ子どもに代表される生まれ変わり事例については、1960年代から精力的に研究がなされてきており、空想、捏造、周りの影響、といった通常の説明では扱えない事例が多数存在するという事実は確立されていると言える。これらの事例に関して、ムーンショット目標9との関連で重要なのは、過去生と現在生で(i)性が異なる事例、(ii)国・人種が異なる事例、(iii)宗教が異なる事例が存在する点である(大門, 2021)。このような事例の存在は、我々の意識が性別や国籍・人種・宗教に縛られたものではなく、その時々で異性、異国の住人、異人種、異教徒になりうることを、そして、性別・国籍・人種・宗教といった属性で他者を排除しようとすることの愚かさを示唆している。したがって、他者、特に性・国・人種・宗教といった属性の異なる他者に対する寛容さの醸成には、生まれ変わり事例に関する知識が有効であると考えられる。

3.4 催眠による胎内記憶

催眠による、生まれる前の記憶である「中間生記憶」の想起については、Wambach (1979) がある程度体系的な調査結果を報告している。それによれば、催眠状態で記憶を想起する割合は50パーセント弱であるが、その多くは子どもたちと同様、自分で親を選んで生まれてきたと語り、また人生の目的についても語っている。

「過去生記憶」の想起については数多くの報告があるが、「生まれ変わり」が性別や国、人種、宗教を越えるという点を示すには、日本における退行催眠（前世療法）ブームの火付け役の一つとなった『前世療法』（ワイス, 1996）に登場するキャサリンが「オランダの兵士（男）」、「ドイツの兵士（男）」、「日本の学者（男）」、「アメリカ南部の黒人（女）」、「スペインの売春婦（女）」といった様々な過去生の記憶を想起したという事実を挙げるだけで十分であろう。

4. 仮想現実

仮想現実（virtual reality）技術が進歩するにつれて、医療・教育・スポーツなどの世界での応用が進み、着実な成果を上げつつある。Bailenson (2018) は、他者への共感力の向上、うつ病患者の自分への思いやりの気持ちの高まり、環境保護的行動の増強、PTSDの治療、

痛みの緩和、などで効果をあげた研究を紹介している。この技術を利用して、仮想現実的な臨死体験、胎内記憶体験を構築することが、ムーンショット目標9が目指す「こころの安らぎや活力を増大し、こころ豊かな状態を叶える技術」や「多様性を重視しつつ、共感性・創造性を格段に高める技術」の創出や確立に繋がるのではないだろうか。

まず臨死体験および退行催眠における疑似的な死の体験について考えてみよう。

臨死体験が人生観に肯定的な変化をもたらす傾向があるという点は明らかであるが、だからと言って臨死体験を目的として人を臨死状態に陥らせることは倫理的に許されない。また、仮に100パーセントの安全性が確立されそれが許されたとしても、臨死体験が引き起こされるとは限らない。先行研究で挙げられている数値は、低いもので6%、高いものでも38%である（Greyson, 2003; Lommel et al., 2001; Pacciolla, 1996; Parnia et al., 2001; Schwaninger et al., 2002）。さらに、臨死体験者であってもその体験内容は一律ではなく、例えば、先行研究で挙げられている、光と出会う「光体験」に関する数値は、低いもので16%、高いものでも62%である（Green and Friedman, 1983; Lindley et al., 1981; Lommel, et al., 2001; Ring, 1980）。また、地獄やそれに類する場所に行くなど悲痛な臨死体験が存在することも事実である（Bush and Greyson, 2014）。

退行催眠における疑似的な死の体験には臨死体験のような危険性はないが、スタンフォード催眠感受性尺度に代表される尺度の存在が示すように（Weitzenhoffer and Hilgard, 1959）、催眠のかかりやすさには大きな個人差があり、その意味で万人向けのツールにはなり難い。

臨死体験や退行催眠における疑似的な死の体験に伴うこのような問題点の解決法のひとつとして、臨死体験の肯定的な部分のみを仮想的に体験できる仮想現実環境の構築が考えられる。実際の臨死体験や、退行催眠下の「死」の体験のような深さは望めないかも知れないが、体験者の写真を用いた擬似的な体外離脱体験や、体験者と近い故人の写真を用いた疑似的な故人との邂逅など、カスタマイズ可能な機能を盛り込んでおくことで、単なる映像視聴に留まらない、臨場感のある体験が可能となるであろう。

次に胎内記憶体験について考えよう。

自らが現在の人生を選んだことや、人生に使命があることを中間生記憶という形で知っていれば、こころの安らぎや活力の増大し、こころ豊かな状態を保つことが可能だと思われる。また、現在の性や国籍、人種、信仰と異なる過去生を記憶していれば、それらの属性の違いによって他者に差別感情を抱いたり、不寛容な態度を取ることは少なくなると思われる。しかしながら、中間生記憶や過去生記憶を語る子どもの割合は決して高くない。母親へのアンケート調査を行った Ohkado (2015) では、自分の子どもが中間生記憶を語ったと回答した母親の割合は全体の13.3パーセント、過去生記憶を語ったと語った割合は全体の4.0パーセントに過ぎなかった⁸。また、年齢を重ねるに連れて（少なくとも顕在的な意識としては）これらの記憶を無くしていくのが通常であり、正確な数字は明らかではないが、

⁸「（狭義の）胎内記憶」および「誕生時記憶」を語ったと回答した割合は、それぞれ、28.1パーセントと16.2パーセントであった。

成人では中間生記憶や過去生記憶を有している者の割合は極めて低いと考えられる。前述のように催眠によって中間生記憶や過去生記憶を想起することは可能だが、退行催眠による擬似的な「死」の体験同様、実際に体験できるかどうかは個人の催眠感受性に左右される。また、ある程度までは施術者による誘導が可能であるが、体験の内容を完全に制御することはできず、狙い通りの記憶が想起される保証はない。

このような弱点を補う方法のひとつとして、仮想現実技術を用いて、中間生体験や過去生体験を擬似的に経験できる環境を構築することが考えられる。仮想現実的な臨死体験環境構築の場合同様、体験者に関わる写真を取り込めるような環境にすることでより臨場感のある経験が可能になると考えられる。たとえば、中間生体験においては、体験者の親の写真や体験者が生まれ育った環境の写真を取り込むような形でカスタマイズを行う。また、過去生体験に関しては、体験者と異なる性・国籍・人種・宗教を持つ人物の人生を用意し、登場人物に体験者自身や体験者と近い人物の写真を投影させる形でカスタマイズすることが考えられる。

5. 人生観の変化を図る尺度

3節で示した研究においては、臨死体験や退行催眠時の疑似的な死の体験、我が子が胎内記憶を語ったことによる人生観の変化を測る尺度として、人生変化目録や改訂版人生変化目録が用いられていたが、臨死体験や胎内記憶、あるいはそれに類する現象に関する知識が及ぼす影響を測る尺度として、「生きがい」を測定する「PILテスト」(PIL研究会, 1993)や、スピリチュアリティを測定する「スピリチュアリティ評価尺度」(濁川他, 2016)を用いた研究が存在する。

たとえば、大石・安川・濁川(2008)は、PILテストを用いて、飯田史彦氏の提唱する「生きがい論」(飯田, 2003, 2004)に関する講義の前後で受講生の「生きがい感」が向上することを示している。また、濁川・奇二・高瀬(2021)は池川明氏による「胎内記憶」に関する講義が受講生のスピリチュアリティ(霊性)を向上させることを示している。

また、加藤直哉氏は(信頼性・妥当性の検討がなされていないため「尺度」と呼んではいけないが)死に対するイメージを調査する質問紙と死後研究の学術調査をA4用紙19ページにまとめた「死後研究の学術調査」というマニュアルを作成し、マニュアルを読むことで死に対する態度に対してどのような影響があるかを調査した。調査対象者は、西洋医学に携わる医師、東洋医学に携わる医師、余命宣告を受けているなど命のリスクのある患者、一般人の4グループであったが、いずれにおいても死に対する恐怖を弱めることができた、と報告されている(加藤, 2019)。

このような先行研究を参考にし、前節で提案した仮想現実環境の効果を測ることで、その有効性、また、講義やマニュアルと比較した場合の優位性を明らかにすることができるのではないかと思う。

6. 結語

本稿では、2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」することを謳ったムーンショット目標9の実現に向けて、次の3点を主張した。

- (A) 機序の解明にはFrederick Myers (1843-1901) が提唱した意識モデルが有望である。
- (B) 安らぎや活力増大のための働きかけとして、臨死体験や胎内記憶現象に代表される、意識の死後存続を示唆する現象の研究によって得られる知見が重要な役割を果たす可能性が高い。
- (C) ターゲット実現に向けて実装可能な技術の一つとして、臨死体験や胎内記憶現象における体験を疑似的に経験できる仮想現実技術が有望である。

目まぐるしく変化している仮想現実技術の世界であるが、現在の技術は十分に深い疑似的な臨死体験や胎内記憶体験を可能にするレベルに達していると思われる。誰もが手軽にこれらの体験を経験することができる装置の実現が待ち望まれる。

謝辞

本稿の内容は20年ほどの間、数多くの方々との議論を通して醸成されてきたものです。筆者の考察の深化を促してくださった全ての方に感謝申し上げます。中でも飯田史彦先生、池川明先生、濁川孝志先生、Bruce Greyson氏、Edward Kelly氏、Jim Tucker氏との対話からは大きな示唆をいただきました。また加藤直哉先生には先生が作成されたマニュアルやご著書のもとになった博士論文をお送りいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

参考文献

- Alexander, Eben (2013) *Seeking Heaven: Sound Journeys into the Beyond* (CD). New York: Simon & Schuster Audio.
- Bailenson, Jeremy (2019) *Experience on Demand: What Virtual Reality Is, How It Works, and What It Can Do*. New York: W. W. Norton & Company.
- Batthyány, Alexander (2018) *Foundations of Near-Death Research: A Conceptual and Phenomenological Map*. Durham, NC: IANDS Publications.
- Bauer, Martin (1985) “Near-Death Experiences and Attitude Change.” *Anabiosis – The Journal of Near-Death Studies*, 5(1), 39-47.
- Brinkley, Dannion, with Paul Perry (1994) *Saved by the Light: The True Story of a Man Who Died Twice and the Profound Revelations He Received*. New York: Villard.

- Brinkley, Dannion, with Paul Perry (1995) *At Peace in the Light: The Further Adventures of a Reluctant Psychic Who Reveals the Secret of Your Spiritual Powers*. New York: HarperCollins.
- Brinkley, Dannion, and Kathryn Brinkley (2008) *Secrets of the Light: Lessons from Heaven*. New York: HarperOne.
- Bush, Nancy Evans and Bruce Greyson (2014) "Distressing Near-Death Experiences: The Basics." *Missouri Medicine*, 111(6), 486-490.
- Ellenberger, Henri F. (1970) *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*. New York: Basic Books.
- Ellis, Ann Frances (2012) *Revelations of Profound Love: New Insights into the Power of Love from Near-Death Experiences*. Tulsa, OK: Trail of Hope Publishing.
- Flynn, Charles P. (1986) *After the Beyond: Human Transformation and the Near-Death Experience*. New York: Prentice Hall Press.
- Green, J. Timothy and Penelope Friedman (1983) "Near-Death Experiences in a Southern California Population." *Anabiosis: The Journal for Near-Death Studies*, 3(1), 77-95.
- Grey, Margot (1985) *Return from Death: An Exploration of the Near-Death Experience*. London: Arkana.
- Greyson, Bruce (2003) "Incidence and Correlates of Near-Death Experiences in a Cardiac Care Unit." *General Hospital Psychiatry*, 25, 269-276.
- Greyson, Bruce and Kenneth Ring (2004) "The life changes inventory-revised." *Journal of Near-Death Studies*, 23(1), 41-54.
- Holden, Janice Miner, Bruce Greyson, and Debbie James (eds.), *The handbook of near-death experiences: Thirty years of investigation*. Santa Barbara, CA: Praeger/ABC-CLIO.
- James, William (1901) "Frederic Myers's Service to Psychology." *Proceedings of the Society for Psychical Research*, 17, 13-23.
- Kelly, Edward F. (2007) "Introduction." In: Kelly, Edward F., Emily Williams Kelly, Adam Crabtree, Alan Gauld, Michael Grosso, and Bruce Greyson (2007) *Irreducible Mind: Toward a Psychology for The 21st Century*, xvii-xxxi. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.
- Lindley, James H., Sethyn Bryan, and Bob Conley (1981) "Near-Death Experiences in a Pacific Northwest American Population: The Evergreen Study." *Anabiosis: The Journal for Near-Death Studies*, 1(2), 104-125.
- Lommel, Pim van (2010) *Consciousness Beyond Life: The Science of the Near-Death Experience*. New York: HarperOne.
- Lommel, Pim van, Ruud van Wees, Vincent Meyers, and Ingrid Elfferich (2001) "Near-Death Experience in Survivors of Cardiac Arrest: A Prospective Study in the Netherlands." *The Lancet*, 358(9298), 2039-2045.
- Moody, Raymond (1975) *Life After Life: The Investigation of a Phenomenon — Survival of Bodily Death*. New York: Mockingbird Books.

- Myers, Frederick W. H. (1895) "The Subliminal Self: Chapter IX. The Relation of Supernormal Phenomena to Time; Precognition." *Proceedings of the Society for Psychical Research*, 11, 585-593.
- Myers, Frederick W. H. (1903) *Human Personality and Its Survival of Bodily Death*. London: Longmans, Green, and Co.
- Noyes, Russel Jr. (1980) "Attitude Change Following Near-Death Experiences." *Psychiatry*, 3, 234-242.
- Ohkado, Masayuki. (2015). Children's Birth, Womb, Pre-life, and Past-Life Memories: Results of an Internet-Based Survey. *Journal of Prenatal and Perinatal Psychology and Health* 30(1), 1-16.
- Ohkado Masayuki, Bruce Greyson (2018) "A Comparison of Hypnotically-Induced Death Experiences and Near-Death Experiences." *Journal of the International Society of Life Information Science*, 36(2), 73-77.
- Pacciolla, Aureliano (1996) "The Near-Death Experience: A Study of Its Validity." *Journal of Near-Death Studies*, 14(3), 179-185.
- Parnia, Sam, D. G. Waller, R. Yeates, and P. Fenwick (2001) "A Qualitative and Quantitative Study of the Incidence, Features and Aetiology of Near Death Experiences in Cardiac Arrest Survivors." *Resuscitation*, 48(2), 149-156.
- Pederzoli, Luciano, Eugenia De Stefano and Patrizio Tressoldi (2021) "Hypno-Death-Experiences: Death Experiences During Hypnotic Life Regressions." *Death Studies*, 45(4), 322-326.
- Ring, Kenneth (1980) *Life at Death: A Scientific Investigation of the Near-Death Experience*. New York: Coward, McCann & Geoghegan.
- Ring, Kenneth (1984) *Heading Toward Omega: In Search of the Meaning of the Near-Death Experience*. New York: William Morrow.
- Sabom, Michael B. (1982) *Recollections of Death, a Medical Investigation: Striking New Clinical Evidence, Having Crucial Implications for Our Understanding of the Near-Death Experience, Presented by a Noted Cardiologist and Professor of Medicine*. New York: Harper & Row.
- Schwaninger, Janet., Paul R. Eisenberg, Kenneth B. Schechtman, and Alan N. Weiss (2002) "A Prospective Analysis of Near-Death Experiences in Cardiac Arrest Patients." *Journal of Near-Death Studies*, 20(4), 215-32.
- Sharma, Poonam K. and Jim B. Tucker (2004) "Cases of the Reincarnation Type with Memories from the Intermission Between Lives." *Journal of Near-Death Studies*, 23(2), 101-118.
- Sudduth, Michael (2016) *A Philosophical Critique of Empirical Arguments for Postmortem Survival*. London: Palgrave Macmillan.
- Wambach, Helen (1979) *Life Before Life*. Toronto: Bantam Books.
- Weitzenhoffer and Ernest R. Hilgard (1959) *Stanford Hypnotic Susceptibility Scales, Forms A & B*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.

秋山佳胤・池川明・梅津貴陽・巽一郎・長堀優・松久正(2019)『いのちのヌード：まっさら

- な命と真剣に向き合う医師たちのプロジェクト ヘンタイドクターズ』東京：ヴォイス.
- 飯田史彦 (2003) 『新版 生きがいの創造』東京：PHP 研究所.
- 飯田史彦 (2004) 『新版 生きがいの本質』東京：PHP 研究所.
- 池川明 (2010) 『ママを守るために生まれてきたよ！』東京：学研パブリッシング.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志 (2008) 「死生観に関する教育による生きがい感の向上」『トランスパーソナル心理学／精神医学』8(1), 44-50.
- 大門正幸 (2018) 「子供が語る胎内記憶によって誘発された霊的変容体験」『人体科学』27(1), 13-22.
- 大門正幸 (2021) 『「生まれ変わり」を科学する』東京：桜の花出版.
- 荻久保則男監督 (2016) 『かみさまとのやくそく～あなたは親を選んで生まれてきた～ (映画)』東京：熊猫堂.
- 奥山輝実 (2005) 『前世療法へようこそ』東京：PHP.
- 加藤直哉 (2019) 『人は死んだらどうなるのか：死を学べば生き方が変わる』東京：三和書籍.
- 熊谷誠慈 (n.d.) “PD による補足.”
https://www.jst.go.jp/moonshot/koubo/202111/files/besshi2_goal9.pdf (2021 年 12 月 31 日アクセス).
- 鈴木秀子 (2005) 『臨死体験：生命の響き』東京：大和書房.
- 内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局 未来革新研究推進担当 (2019) 「ムーンショット型研究開発制度の概要」 <https://www8.cao.go.jp/cstp/moonshot/gaiyo.pdf> (2021 年 12 月 31 日アクセス)
- 濁川孝志・奇二正彦・高瀬貴祥 (2021) 「霊性（スピリチュアリティ）を醸成するためのツールの研究」『コミュニティ福祉学部紀要』23, 35-51.
- 濁川孝志・満石寿・遠藤伸太郎・廣野正子・和秀俊 (2016) 「日本人青年におけるスピリチュアリティ評価尺度の開発」『トランスパーソナル心理学／精神医学』15(1), 87-104.
- PIL 研究会 (1993) 『生きがい PIL テストつき』東京：システムパブリカ.
- ワイス、ブライアン・L / 山川紘矢、山川亜希子訳 (1996) 『前世療法：米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』東京：PHP 研究所.